ホセ・デ・エスカンドンの都市計画モデルに関する考察

CONSIDERATIONS ON URBAN MODEL BY JOSÉ DE ESCANDÓN

J.R.ヒメネス ベルデホ*, 布野 修司**, 齋木 崇人***
Juan Ramon Jimenez Verdejo, Shuji FUNO and Takahito SAIKI

Authors have been conducting the field research under the title 'Origin, Transformation, Alteration and Conservation of Urban Space of Colonial cities' since 1999. In the period of the Spanish urbanism in America, one of the most interesting creations was the Colony of Nuevo Santander, constructed 250 years ago. The formation of this group of spanish colonial cities was made at the same time, in the period (1749-1776), in the same area (Nuevo Santander of Mexico, now Tamaulipas region) in the same territorial net and designed all by the same person (Jose de Escandon) and with similar plan. But in that time all theses cities were planed under the influence of 250 years before of Spanish urban experience in America.

This paper analyze *Urban Model by José de Escandón*. The design of the cities of D. Jose Escandon was based on the same grid model with square Plazas with dimensions that move between 124 varas and 224 varas. The form and distribution of the block depends on the dimension of the Plaza. This paper discusses mainly the differences between the Escandon's model and the model by Indias Laws.

Keywords : José de Escandón, Nuevo Santander, Indias Laws, Spanish colonial city, Typology, Grid
 ホセ・デ・エスカンドン、ヌエヴォ・サントアンデル、インディアス法、スペイン植民都市、類型、グリッド

1 研究の目的と背景

本研究は、「植民都市空間の起源・変容・転成・保全に関する調査研究」^{注1)}と題する植民都市研究の一環として、これまで主として対象としてきたオランダ植民都市に加えて、スペイン植民都市を対象として、さらにその拡大深化を図ることを大きな目的とするものである。本研究の遂行過程で、幸運にも、セビージャ Sevilla のインディアス古文書館 El Archivo General De Indias に収蔵された植民都市関連地図資料全 7152 枚をマイクロフィルムの形で入手することができた^{注2)}。この資料の全体については別途分析しつつあるが、本稿では、スペイン人入植者ホセ・デ・エスカンドンが、メキシコのヌエヴォ・サントアンデル（現タマウリパス Tamaulipas 県）において計画建設した 25 の都市のうち、都市図資料の得られた 15 の都市図を対象として、スペイン植民都市の計画理念をめぐって、その具体例における特徴を明らかにしたい。

スペイン植民都市については、インディアス法^{注3)}の規定に基づいて、その基本理念が一般的に論じられるが、具体的な事例については、基本理念の機械的適用という理解にとどまるものがほとんどであり、詳細な考察はほとんどない。本稿は、スペインにおいてもこれまで知られてこなかったホセ・デ・エスカンドンのヌエヴォ・サントアンデル計画を明らかにすることにおいて、大きな意義を有している。

スペイン植民都市に関する論文は枚挙にいとまがないが、本稿が前提とする主要な文献は末尾に挙げる通りである。英語文献については、Kagan, Richard L (2000) ^{注4)}に詳細な Bibliography がある。また、日本語文献については、布野修司編『近代世界システムと植民都市』(2005) ^{注5)}に文献リストを付けている。本稿は、J.R.ヒメネス・ベルデホの学位請求論文^{注6)}の一部を構成している。

2 ホセ・デ・エスカンドン

ホセ・デ・エスカンドンは、1700 年 5 月 19 日、カステイジャ・ラ・ヴィエハ Castilla la Vieja 地方のサントアンデル Santander のソト・ラ・マリナ Soto la Marina 村で、ホアン・デ・エスカンドン・イ・デルモロソ Juan de Escandon y de Ruroroso とフランシスカ・デ・ラ・ヘルゲラ・イ・デ・ラ・ジャタ Francisca de la Helguera y de la Llata の息子として生まれた。その生涯は、L. D. プラット^{注7)}によれば、およそ以下のようである。

ソト・ラ・マリナで幼時を過ごしたホセ・デ・エスカンドンは、15 歳の時に、ユカタン Yucatan の総督となるホセ・デ・ヴェルティス・イ・ホンタノン Jose de Vertiz y Hontanón の船隊とともにヌエヴァ・エスパーニャ Nueva Espana に渡る。コンパニア・デ・カバジェロス・モンタドス・デ・メリダ

図1 メキシコとタマウリパス地域

* 滋賀県立大学環境科学研究科 客員研究員・芸術工博

** 滋賀県立大学環境科学研究科 教授・工博

*** 神戸芸術工科大学 教授・工博

Research Fellow, Graduate School of Environmental Planning, University of Shiga Prefecture, Ph. D.

Prof., Graduate School of Environmental Planning, University of Shiga Prefecture, Dr. Eng.

Prof., Graduate School of Environmental Design, Kobe Design University, Dr. Eng.

図2 ホセ・デ・エスカンドンの入植ルート

ヌエヴォ・サンタンデル (タマウリバス地域): 図1の網掛け部分

- 1.-ジェラ Llera (1748/12/25) 2.- グエメス Gomez (1749/1/1) 3.- パディジャ Padilla (1749/1/6) 4.- サンタンデル Santander (1749/2/17) 5.-ブルゴス Burgos (1749/2/20) 6.- カマルゴ Camargo (1749/3/5) 7.- レイノサ Reinos (1749/3/14) 8.- サン・フェルナンド San Fernando (1749/3/19) 9.- アルタミラ Altamira (1749/5/2) 10.- オルカシタス Horcasitas (1749/5/11) 11.- サンタ・バーバラ Santa Barbara (1749/5/19) 12.- インファンテス Infantes (1749/5/26) 13.- ドロネス Dolores (1750/8/22) 14.- ソト・デ・ラ・マリナ Soto de la Marina (1750/9/3) 15.- アグアヨ Aguayo (1750/10/6) 16.- レヴィジャ Revilla (1750/10/10) 17.- エスカンドン Escandon (1751/3/15) 18.- オヨス Hoyos (1752/5/19) 19.- サンティジャナ Santillana (1752/12/16) 20.- ミエル Mier (1753/3/6) 21.- ラレド Laredo (1755/5/15) 22.- クルイジャス Cruillas (1766/5/9) 23.- サン・カルロス San Carlos (1766/6/6) 24.- サン・ニコラス San Nicolas (1768/4/10) 25.- クロア Croix (1769/6/3)

図3 ヌエヴォ・サンタンデル入植地 AGI

Compania de Caballeros Montados de Merida で、5年間見習いを勤めた後、叔父のアントニオ・デ・ラ・エルゲラ・カステイジョ Antonio de la Helguera Castillo 大尉の指揮下の騎兵隊員となる。カンパチェ Campeche 海岸で英国軍の攻撃を撃退してその名を挙げる。この軍功によって、エスカンドンは、1721年、ケレタロ Queretaro に転属される。1724年あるいは1727年にスペインに帰国し、アナ・デ・アロジョ Ana de Arroyo 大尉の娘アグスティン・デ・オシオ・イ・オカンポ Agustin de Ossio y Ocampo と結婚している。一説によると、彼らはケレタロの貴族の出だとい^{注)}。

1727年に、セラジャ Celaya の叛乱を平定し、彼は、インファンテリア・カバジェリア・デ・ラス・コンパニャス・ミリシヤナス・ケレタロ Infanteria y Caballeria de las Companias Milicianas de Queretaro 軍の最上級曹長に昇進する。5年後、レアル・デ・ミナス・デ・ガナファト Real de Minas de Guanajuato 近くでのインディオの叛乱を鎮圧し、さらに続いて、イラプアト Irapuato でも戦果を挙げている。その最大の軍功は、1734年のサンミゲル・エル・グランデ San Miguel el Grande 地方の10,000人蜂起の制圧である。その軍事的な戦果のみならず、400人の捕虜を人道的に扱ったことでもその名を高めた。

1740年、上司であったホセ・デ・ウルティアガ José de Urteaga 大尉の死後、その跡を継いで昇進し、シエラ・ゴルダ Sierra Gorda 地方の総督に任命されている。任期中にメキシコ副王政府に頼らず独力で領内を4度にわたって遠征し収めたこと、また、1742年にも独力で英国軍のヴェラクルス Veracruz 攻撃に備えたことで、ホセ・デ・エスカンドンはさらに賞賛を受けている。1743年と1745年にはハウマヴェ Jaumave とパラミジャス Palmillas の司教区を再建する。

以降、続けてみるように、ヌエヴォ・サンタンデルの入植と都市建設を指揮することになる。エスカンドンは、1770年9月10日、メキシコで死んだ。享年70歳である。

3 ヌエヴォ・サンタンデル入植地の建設

ヌエヴォ・サンタンデルはメキシコ北東部に位置し(図1)、面積78,932km²、北はアメリカ合衆国と長さ370kmにわたって接し、東は420kmにわたってメキシコ湾に接している。この地域は、1540年にはスペインに知られていたが、メキシコ市から離れていたために、18世紀の初めまで入植者はほとんどなく、現地人が住み続けていた地域である。また、北から常に英国とフランスが攻撃を仕掛けてくる地域であった。

そこで、エスカンドンに託されたのがセノ・メキシカノ Seno Mexicano^{注)}地方の併合であり、ヌエヴォ・サンタンデルへの入植である。彼は、まず、シエラ・ゴルダとリオ・ヴェルデ Rio Verde の司教区を調査し、牧師の財務管理の問題点を指摘し、ハウマヴェとパラミジャスと同じように、司教区の再編を行う。地域を完全に支配するために、当初はセノ・メキシカノの制圧に集中している。そして、1747年に大規模な踏査を行う。この時の軍隊には、ケレタロ Queretaro、タンピコ Tampico、ヴァラ Valles, リナレス Linares, チェラリョ Cerralvo, カオフイ Coahuila、バビア・デ・アスピリトウ Bahia de Espiritu の入植者たちが参加している。彼らは、この時、エスカンドンがかつて踏査した道を辿り、土地の地形、気候、動植物、鉱物などの知識を得ている。新たな入植地やインディアン居住地、司教区を決めるためのみならず、入植地に最も相応しい作物を決定するためである。

得られたデータをもとに、エスカンドンは、14都市を建設する広大な地域

図4 ホセ・デ・エスカンドンによる15の都市計画図: AGI. Mapas y planos Santo Domingo 189, 194, 179, 183, 185, 187, 184, 191, 182, 180, 190, 188, 186, 192, 193.

計画を立てた。後に総計 25 都市に増加されるが、およそ 7~8 レグア ^(注1) (リーグ league) 毎に都市を建設する計画である。一定の間隔^(注1)は、敵の強襲の際に相互に協力して防衛するためである。そして、司教区の設定は現地人の強化を目的としていた。こうして、入植のために具体的な都市モデルが検討されるのであるが、その事業費および維持管理費^(注2)は他の都市建設に比べると極めて少なく、スペイン王室が大いに評価するものであった。

計画案は、フェルナンデス・デ・ハウレグイ Fernandez de Jauregui、バルキン・デ・モンテクエスタ Barquin de Montecuesta、ラドロ・デ・グエヴァラ Ladrón de Guevara 等の案とともに、1748 年 5 月 8 日~13 日に副王ドン・フアン・フランシスコ・グエメス Don Juan Francisco de Guemes y Horcasitas 等が参加して、メキシコで開かれた国家会議で提案され満場一致でエスカンドンの案が選ばれた^(注3)。

同じ年の翌 6 月から 12 月にかけて副王領全体で入植者を募る一大キャンペーンが行われる。入植者には世帯当たり 100 ペソから 200 ペソが支給され、宅地と耕作地、牧羊地が与えられるというのが条件である。情宣は、ケレタロ Queretaro、ポトシ Potosi、カラカス Charcas、フアステカス Huastecas、コアフィラ Coahuila、ヌエヴォ・レイノ・デ・レオン Nuevo Reino de Leon で功を奏し、11 月末までには第一段階の入植を完遂するに足る集団が集まる。12 月半ばに、エスカンドンの指揮の下、3,000 人を超える一隊はケレタロを出発し、現地人の叛乱を避ける安全な道を確保しながら、トゥラ Tula、パルミジャス、ハウマヴェエを通して、シエラ・マドレ・オリエンタル Sierra Madre Oriental 近く、地域の中央部、シエラ・デ・タマウリパス Sierra de Tamaulipas に到達する。以降開拓された 25 の入植地 (都市) と建設年は図 2 のようである。

最初の都市ジェラはエスカンドンの妻の名に由来する。エスカンドンは、当初から入植地の中心に相応しい土地を捜しているが、最終的に、フレハドロス Flechadores 川北東部にシンコ・セノレス・サンタンデル Cinco Senores de Santander 建設を決定したのは 1749 年 2 月のことである。当初の入植者は 426 人であった^(注4)。後に、この首都は西に移動するが、その名サンタンデルは、エスカンドンの故郷の名に因んだものである。

こうして、1775 年までの 7 年間で 21 の入植地が建設されている。入植地の選定に当たって第一に考慮されたのはそれぞれの場所の、土地の質と資源である。また、土着のインディアンとの和平、入植者を保護するための軍事的観点も考慮された。トゥラ、マルミジャス、ハウマヴェエ、サンタ・バーバラ Santa Barbara の入植地は鎖状に連結され、現地人の叛乱の際には入植者の避難、退避のルートが形成されている。アルタミラ Altamira、ホルカシタス Horcasitas、エスカンドン Escandon、ジェラ Llera、アグアヨ Aguayo、ホジョス Hoyos、レアル・デ・ロス・インファンテス Real de los Infantes からなる線は、シエラ・マドレ Sierra Madre 逃げ込もうとする反抗的な現地人を止める防御線とされた。ゲメス Guemes、パディージャ Padilla、サンタンデル、サンティラナ Santillana、ソト・デ・ラ・マリナ Soto de la Marina、ブルゴス Burgos、サンフェルナンド San Fernando の入植地は、現地人との接触、連合を避けるための、新旧のタマウリパスを分割する線を形成する。そして、レイノサ Reynosa、カマルゴ Camargo、ミエル Mier、レヴィージャ Revilla、ラレド Laredo を結ぶ線は、ヌエヴォ・レイノ・デ・レオン Nuevo Reino de Leon との接触を避けて隣接する現地人を鎮圧する線とされた。

入植地の軍事的性格は、それぞれの入植地の首長が軍隊における地位を与えられていたことが示している。すなわち、入植地は一種の軍事キャンプ、さらには前線キャンプとして計画されたのである。

初期に建設された都市が発展し始めると、新たな入植者が現われる。特に、ヌエヴォ・レイノ・デ・レオンから入植が多かったが、こうした入植地のひとつが、ドミンゴ・デ・ウングアサ Domingo de Ungaza 大尉が 160 人とともに、サンチャゴ丘の麓に建設した (1757 年) ヴィラ・レアル・デ・ボルボン Villa Real de Borbon である。一方、エスカンドンによる入植の成功は、妬み嫉みを生んだようである。その不手際に対する告訴もあり、副王は査察を要求している。ホセ・ティアンダ・デ・クエボ Jose Tienda de Cuervo とアグスティン・ロペス・デ・ラ・カマラ・アルタ Agustin Lopez de la Camara Alta によって行われた査察 (1757 年) は、エスカンドンに対して概して好意的であったが、さらに 3 つの入植地の建設が要求される。その要求に従って建設されたのがヌエストラ・セノラ・デ・モンセラ・デ・クルイジャス Nuestra Senora de Montserrat de Cruillas (図 2 の 22、現ロス・エンシノス Los Encinos) とレアル・デ・サン・カルロス・デ・ボロメオ Real de San Carlos de Borromeo (図 2 の 23) ^(注5) である。また、続いてレアル・デ・サン・ニコラス Real de San Nicolas が建設されるが、第三の都市については、中傷があつてエスカンドンはほとんど関わっていない^(注6)。さらに、エスカンドンは、アグアヨ Aguayo、ジェラ Llera、ゲメス Guemes からの入植者のために、テティジャス Tetillas にプリシマ・コンセプション・デ・クロア Purisima Concepcion de Croix の建設を依頼されるが、このエスカンドン最後の都市はその死後の 1806 年頃、洪水のためにパエ・デ・ピエドラス Paso de Piedras へ移転を余儀なくされている。

4 ホセ・デ・エスカンドンの都市計画モデル

ホセ・デ・エスカンドンに関わる地図、都市図として、セビージャのインディアス古文書館に残されているのは 16 枚である。内 1 枚は、ソト・デラ・マリナの地形図であり、残りが都市図である。15 の都市図は図 4 のようである。1751 年までに建設された 17 の年のうちインファンテス (図 2 の 12) とドロレス (図 2 の 13) が欠けている。図 4 に示すのは、AGI. Mapas y planos Santo Domingo 189, 194, 179, 183, 185, 187, 184, 191, 182, 180, 190, 188, 186, 192, 193 で、サイズは、410x300 ミリメートル、羊皮紙、羽ペン書きである。

一見、全てよく似ている。以上の建設過程から見ても、一定のモデルを基にして各都市が建設されたのは明らかである。

4-1 都市建設過程

エスカンドンは、入植の単位を家族とし、都市建設に必要な数は、50~100 家族とした。都市計画以前に入植者の構成が決定されているのが基本で、ともに場所を訪れ、建設地を決定している。スペイン人と現地人との融和統合は宗教的教化を基本とし、伝道師たちを都市の近くに居住させた。必要な物質資源の配置は、各家族の経済活動が地域社会内で可能となるように考慮された。すなわち、住居を建設し、食物を植え、家畜を飼う土地が都市内に与えられ、都市外に牧草地も与えられた。社会は、大きく、行政担当者および軍人、聖職者、市民の三つの層から構成された。地域社会の安全が第一優先であり、防御のために軍隊が前面に立った。サンタンデルのような都市では、エスカンドンは、全住民と 300 頭の馬が籠城できる要塞をつくっている。

平らで十分な広さが確保できる土地、農耕に適した肥沃な土壌、水の豊富な川が存在、住宅建設用の資材の存在などを考慮しながら都市建設の場所をエスカンドンは選んでいるが、常に、都市間の連絡を考慮し、距離を計算している。上述のように 7 レグア~45 レグアの距離に納めている。また、カマルゴ、サンタンデル、ホルカシタスという南北、中央に三つの中核都市を

設定している。

各都市の建設は、G. グアルダ^(注7)によれば、インディアス法に基づいて、およそ、以下のような手順で行われた。

- 選地：自然資源、気候、風通し、日当たりなどが考慮されて建設用地が選定される。
- 建設儀礼：入植者や現地人の参加する中で、神と王の名において領域を確保することが公的に宣言される。また、市会の成員が選ばれる。
- 命名：さらに同時に、都市の名前が決められる。都市名は、入植者に縁があるスペインの都市や場所の名、王や政府関係者の名、聖人などの他、現地人の言葉からも採られている。
- プラサ plaza^(注8) (広場) の位置・規模の確定：通常、B、C とともに同じ日、場合によっては前日に行われる。中央にロジョ Rollo と呼ばれる「都市柱」がその都市の象徴として建てられる。このロジョは、都市が移転される場合には新たな広場の中心に移される。

- 教会用地の決定：プラサに続いて教会用地が決定され、十字架が立てられて、最初のミサが行われる。エスカンドン^(注9)は、100 ヴアラ vara×200 ヴアラか、200 ヴアラ×200 ヴアラとしている。

- カビルド Cabildo (市庁舎) の確定：教会に続いて、市庁舎の用地が決定される。

- 街区の分割と配置：続いて宅地が割り当てられる。有力者はプラサに近接して宅地を所有する。

- 地図の作製：建設の記録とともに地図が作製される。

ヴァラは、ピエ pie とともに、身近なスケールについて用いられる。ピエは「足」を意味し、ほぼフット (フィート) と同じである^(注10)。ヴァラは「木組、足場」に由来し、「細長い棒」を意味するが、3 ピエの長さをいう。他にパルマ palma (「手のひら」)、プラサ braza という単位が用いられ、1 ヴアラは4パルマ、2 ヴアラが1 プラサである。具体的には1 ピエ=0.2786m、1 ヴアラ=0.8359mとされている

4-2 都市モデル

エスカンドンの15の都市図(図4)を方角を合わせてまとめると図5のようになる。これを検討すると、大きく二つのモデルがあることがわかる。街区の大きさは、200vara×200vara と基本とするが、プラサの大きさ (A:100vara×100vara, B:200vara×200vara) と宅地の大きさ (A:20vara×100vara, B:25vara×100vara) が異なっている。

モデル A (図6) は、中央のプラサ (100vara×100vara) の東西南北に幅員 12vara の4本の大通りが走る構造をとる。街区は、中央に長方形の区画 (100vara×200vara) と4隅の正方形の区画 (200vara×200vara) の二種類 (各4区画) からなる。このうち、長方形の1街区は教会用地とされる。宅地は、20vara×100varaを単位とし、カビルド用地は、その2倍 (40vara×100vara) とされる。宅地は従って108宅地 (20宅地×4+10宅地×2+8宅地) となる。

このモデル A を用いた都市のなかで、最も多いのは教会用

地をプラサの東に、カビルド用地を北東に配置する A-1 のタイプである。ゲメス、パディジャ、ブルゴス、サンタ・バーバラ、アグアヨ、レヴィジャの6都市で用いられている (A-1-1)。カビルド用地の位置と大きさ、また一部の宅地の規模が異なるのがエスカンドンである (A-1-2)。カビルド用地をプラサの南西とし、さらに教会用地の規模が小さくそれに伴って一部の宅地の規模を異にするのがアルタミラである (A-1-3)。さらに、北東部の大通りが宅地化され、またその宅地割りが乱れたのがジェラであり (A-1-4)、東南部が大きく欠けたのがソト・デ・ラ・マリナである (A-1-5)。

カビルドをプラサの北東角に置く以上の A-1 に対して、カビルドを教会の向かいプラサの北西に置くのがサン・フェルナンド (A-2-1) であり、レイノサ (A-2-2) である。

モデル B (図5) は、中央のプラサ (200vara×200vara) の東西南北に幅

図5 ホセ・デエスカンドンによる15都市の宅地分割図

員 12vara の 4 本の大通りが走る構造をとる。いわゆるナイン・スクエア (3×3=9) の分割である。8 つの街区は、200vara×200vara、このうち、1 街区は教会用地とされる。宅地は、25vara×100vara を単位とし、基本的に 1 街区 16 宅地からなる。カビルド用地は、街区の半分 (100vara×200vara) とされる。宅地は従って 104 宅地 (16 宅地×6+8 宅地) となる。

このモデル B は、カマルゴ、サンタンデル、ホルカシタスの 3 都市で用いられている。前述のように、この 3 都市は南北、中央の中心都市として建設されたものである。宅地割りが行われていない街区も残されている。

4-3 空間分割システム

ホセ・デ・エスカンドンがヌエヴォ・サンタンデルで用いた都市モデルは、大きくはスペイン植民都市計画の流れの中に位置づけることができる。冒頭に述べたセビージャのインディアス古文書館に収蔵された植民都市関連地図の全体についての分析の手掛かりとして、このエスカンドンの都市モデルの特徴についていくつか指摘してまとめる考察としたい。

スペインによる植民都市の計画がどのような理論的背景において行われたかについては、多くの研究があるが、最もよく知られているのは、フェリペ II 世による 1573 年のインディアス法である。しかし、日本ではほとんど言及されないそれ以前に遡る都市計画の伝統がある。1300 年のマジョルカの王ジェイム Jaime II 世の法令が知られる他、フランチェスク・デ・エクシエメニス Francesch de Eximenis の理想都市モデル (1385 年) がある。理論モデルとしての一般的な図式の提示にとどまっているこのふたつのモデルと比べると、エスカンドンの都市モデルは、極めて具体的であり、プラサの配置を最初とする建設のプロセスが示されている点が貴重である。また、都市の境界、市壁がなく、グリッドの延長が想定されている点、全体像を予め想定するエクシエメニスとは異なっている。さらに、教会、市庁舎を中心に集中させるエスカンドンのモデルと市庁舎を市門近くに置いて、政治的権力と宗教的権力を分離するエクシエメニスのモデルとは異なっている。

スペインの都市計画の伝統とイベロ・イスパニアの植民都市計画の関係については別稿が必要であるが、1573 年のインディアス法と比較して、その幾何学的分割パターンについては以下を指摘できる^{注20)}。

①プラサの形：エスカンドンのモデルが正方形であるのに対して、インディアス法は 2:3 の長方形を推奨している。

②プラサから伸びる通りの数：エスカンドンのモデルは 8、インディアス法は 12 である。

③プラサの規模：エスカンドンのモデル (特に A タイプ) が基本的に小さい。

④アーケードの存在：エスカンドンのモデルのプラサにはアーケードが設けられない。

⑤街区規模：都市全体の規模は、ほぼ同じであるが、街区の規模は、エスカンドンのモデルが大きい。

⑥宅地の規模：エスカンドンのモデルの方が大きい。the Laws of the Indies (2000m² instead of 1147m²)。

⑦宅地の分割システム：エスカンドンのモデルは、画一的に宅地を分割するが、インディアス法の場合、4 分割した上で、1/4 を建設者に、3/4 を入植者に割り当てるのが一般的である。

5 まとめ

以上のように、ホセ・デ・エスカンドンに即して、スペイン植民都市計画の具体的な展開を極めて具体的に知ることができる。その都市計画モデルは、

モデルA (中央プラザ100vara×100vara)

モデルB(中央プラサ200vara×200vara)

図6 ホセ・デ・エスカンドンの都市モデル類型

図7 エクシメニスの都市計画モデル

インディアス法に大きくは従うとしても、空間分割のシステムとしてはひとつのヴァリエーションをなしているといっている。

個々の都市の建設過程の詳細については省かざるを得なかった。また、15の都市の現状についても紙数の関係で省かざるを得ないが、およそ、以下のようである。

- A 人口25万人を超える都市：アグアヨ、レイノサ
- B 人口5万人程度の都市：サン・フェルナンド、アルタミラ
- C 人口1万人程度の都市：サンタンデール（ヒメネス）、カマルゴ、エスカンドン（Xicotencatl）
- D 人口5,000認定度の都市：パディジャ、レヴィジャ（Nuevo Guerrero）、オカンボ（Santa Barbara）、ソロ・ラ・マリナ、ジェラ
- F 人口2,000人以下の都市：ホルカシタス（Magiscatzin）、ゲメス、ブルゴス

いずれも、都市核に当初のグリッドを残しているが、変化の違いは大きい。ほぼ同じ都市モデルから出発して、250年を経た現況は、都市の変容過程を様々な角度から考察する大きな素材となるであろう。その際、変わるものと変わらないもの、都市組織と都市住宅のあり方を明らかにする必要がある。住居類型についても既にある程度の資料を得ている。

以上についての考察を今後の課題としたい。また、セビージャのインディアス古文書館に収蔵された植民都市関連地図資料全7152枚の分析を続稿としたい。

参考文献

- 1) Alcina Franch, Jose; La ciudad hispanoamericana. El sueño de un orden, El pasado prehispánico y el impacto colonizador, CEHOPU, CEDEX, Madrid, 1997.
- 2) Artega Zamaran; La ciudad iberoamericana, La Urbanización hispanoamericana en las Leyes Indias, Actas del Seminario Buenos Aires 1985, CEHOPU, Madrid, 1987.
- 3) Bennisar, Bartolome; Obras Hidráulicas en America colonial. El agua en el nuevo mundo, M.O.P.T.M.A. Madrid, 1993.
- 4) Calderon Quijano y Jose Antonio; Fortificaciones en Nueva Espana, C.S.I.C. Madrid, 1984.
- 5) Dienes Rubio, Pablo; Estudios sobre urbanismo ibero-americano. Siglos XVI al XVIII, Plaza y espacio publico en la Baja Andalucia, J.A. Sevilla, 1999.
- 6) Dominguez Ortiz, Antonio; La Conquista y la Ocupacion del territorio, Andalucia en America, El legado de ultramar, J.A. Barcelona, 1995.
- 7) Gonzalez Garcia, Pedro et al; Archivo General de Indias, Ministerio de Educacion y Cultura, Lunwerg, Barcelona, 1988.
- 8) Gonzalez Salas, Carlos; Cartografia Historica de Tamaulipas Geografia misional y eclesiastica de Tamaulipas, I.T.C. Mexico D.F. 1990.
- 9) Gonzalez, Julio; Catalogo de mapas y planos del Archivo General de Indias, D.G.A.B. Madrid, 1985, CIDA, 16, 16.
- 10) INEGI; Tamaulipas XII Censo General de Poblacion y Vivienda, INEGI, Mexico, 2000.
- 11) Kagan, Richard L., Urban Images of the Hispanic World 1493-1793, Yale University Press, New Haven & London, 2000.
- 12) Solano, Francisco de; Normas y Leyes de la ciudad Hispano-americana 1492-1600, C.S.I.C., Madrid, 1990.
- 13) Solano, Francisco de; Ciudades hispanoamericanas y pueblos de indios, C.S.I.C., Madrid, 1990.
- 14) Rodriguez Vicente, Encarnacion; El comercio entre Espana e Indias, Historia Urbana de Iberoamerica, Consejo Superior de los Colegios de Arquitectura de Espana, Junta de Andalucia, Madrid, 1987.

註

- 註1) 文部省科学研究費助成研究、主査市野修司、1999年～2001年。植民都市研究は、第1に〈支配→被支配〉〈ヨーロッパ文明→土着文化〉の2つを柱とし、都市の文化変容の研究である。植民都市は、非土着の少数者であるヨーロッパ人による土着社会の支配をその本質としている。西欧化、そして近代化を推し進めるメディアとして機能してきたのが植民都市である。植民都市の計画は、基本的にヨーロッパの理念、手法に基づいて行われた。西欧的な理念が、他の地域においてどのような役割を果たしたのか、どのような摩擦軋轢を起し、どのように受け入れられていったのか、計画理念の土着化の過程は、どのようなものであったのか、さらに計画者と支配者と現地住民の関係はどのようなものであったのか、等々を明らかにすることは、それぞれの都市構造を理解する上で大きな意味をもっている。海外進出の先鞭をつけたポルトガルの場合、現地社会との関係はそれぞれ個別の交易関係に過ぎなかった。スペインの場合、「新大陸」は帝国の拡張空間であった。オランダは、既に成立していた各地域の域内交易ネットワークを繋いだ。そして、世界を帝国主義的に分割する段階が来る。世界システムの形成と植民都市のネットワーク形成の関係をダイナミックに捉えることは大きなテーマとなる。
- 註2) インディアス古文書館（AGI.）は、1785年にカルロス三世 Carlos IIIによって創設された。現在16部門のうち、第16部門の地図・計画図 Mapas y Planos 部はグラフ

イカルなデータを集中的に集めている。ペドロ・トーレス・ランサ Pedro Torres Lanza が1897年にこの部門をつくり、現在も収集が続けられている。

- 註3) *Leyes de Indias*: インディアスと総称されたスペイン領アメリカの植民地律法の総体を指し、法源はカスティーリヤ法と本国から発せられた植民地のための諸立法から成る。植民地の経営には、既存の制度や法のみでは不十分であり、新たな制度や機関が導入され、多くの法令が本国から発せられた。1573年のフェリペⅡ世によるインディアス法はこれらのうちのひとつである。17世紀中ごろには既に40万件を超えており、1680年にこれらを編集したカルロスⅡ世による「インディアス法集成」が公布された。新大陸の富の開発とカトリックの布教という2大方針に集約されるが、多くの不備や欠陥があり、論理的な体系を欠いていた。佐藤明夫、インディアス法スペイン・ポルトガルを知る事典、平凡社、pp.50～51, 1999。フェリペⅡ世法とカルロスⅡ世法との比較については、加嶋章博、古山正雄、「スペイン植民都市計画法におけるフェリペⅡ世法とカルロスⅡ世法の継続性に関する考察」、日本建築学会計画系論文集、第554, pp.329-335, 2002年4月がある。

註4) 主要参考文献 [11]

註5) 京都大学学術出版会、2005年

註6) Jimenez Verdejo, Juan Ramon; The Spanish-American City Study of the urban model used by José de Escandón to create the Colony of Nuevo Santander, Ph. D. Dissertation, 2005（ヒメネス・ベルデホ・ホアン・ラモン、[ホセ・デ・エスカンドンがヌエボサンタンデール建設の際に用いたイスパノアメリカのモデル都市計画に関する研究]、神戸芸術工科大学学位請求論文2005年）

註7) Lyman D. Platt, 'The Escandon Settlement of Nueva Espana', 316W.500N., St. George, UT84770

註8) Zorilla(1984), p.136

註9) メキシコ湾岸部。Senoは乳房の意。湾曲した部分を言う。

註10) 一時間に歩く距離をいう。古代のスペインでは、5572.7mとされる。英米では約3マイルとされる。

註11) 実際は、7レグアから45レグアまでの幅がある。

註12) 当時、1,150,000ペソとされる。

註13) This was confirmed by the Virrey, the 31st of May, through the designation of Jose de Escandon for the "Intendancy, Pacification, Reduction and Population of the Coast of the Seno Mexicano", which later was identified as the Colony of New Santander (fig. 4.4).

註14) coming from Monterrey and Linares in the Reino de Nuevo Leon. All the families received plots in the settlement, which were distributed in seven of the eleven blocks, according to the original trace.

註15) リナレス、ブルゴス、レアル・デ・ボルボンから200人が参加している。

註16) 第三の都市の建設が依頼された時、エスカンドンは首都メキシコに呼び戻されて、ほとんど関わっていない。実際に現場を担当したのは、ファン・フェルナンド・デ・ナラシオ卿 sir Juan Fernando de Palacio とホセ・オソリオ・デ・ジャマス Jose Osorio de Llamas である。

註17) Guardia, Gabriel, "Tres reflexiones en torno a la fundacion de la fundacion de la ciudad Indiana Estudios sobre la ciudad iberoamericanas", C.S.I.C., Madrid, 1983

註18) plaza: スペイン語で「広場」の意味。ギリシャ語 platea 「広い通り」、ラテン語 platea 「通り」より派生。

註19) 1pie は約1フィート=0.278635m (12ブルガダ pulgada (インチ))。pie は「足」、pulgata は「親指の大きさ」を意味する。

註20) インディアス法の空間分割に関する記述は、『アジア都市建築史』（昭和堂、2003年）「インディアス法—スペイン植民都市計画の原理—」（pp.320-322）に訳出している。

(2006年6月10日原稿受理、2007年3月27日採用決定)